シリーズ

西淀川記憶あつめ隊

Vol.25

株式会社シミズインダストリーは「いただいた仕事は断らない！」をモットーに西淀川で経営を続ける精密加工メーカーです。73年続くその歴史を、清水美穂会長にふりかえっていただきました。

2020年10月12日ヒアリング

ヒアリングに応じる清水会長（大阪市立大学・除本ゼミのみなさんと）

父の創業した工場を受け継ぐ

シミズインダストリーは戦後間もない1947（昭和22）年、清水会長の父親が個人で創業された鉄工所からはじまります。当初、野里で操業していましたが、1～2年後には現在の姫里に移転。清水会長は長女として、大学卒業後、すぐに工場で働きはじめ、1989年に社長として経営を引き継ぎました。

一度は父親から「女が鉄工所やっていくのは難しいから、工場はやめてマンションを建てたら」と言われましたが、その頃には、旋盤の仕事を覚えて面白くなっていました。

「小さい頃は、鉄工所が大嫌いだったの。臭いし音もするし油もつく。旋盤は、熱を持った切子（鉄くず）がはねて首にあたったりして傷だらけになるけど、仕事を覚えたかった」と言われます。職人さんが10人ほどで、手作業で旋盤の仕事をしていた時代でした。

いくつもの機械がひしめく工場内。

いち早くコンピューター制御の機械を導入

あるとき、豊中に、女性の社長が経営する会社があると紹介を受け、見学に行ったところ、コンピューター制御で自動的に切削加工を行う高額なNC旋盤の機械を導入し、女性のオペレーターが操作をしていました。その様子に触発され、西淀川の中でもいち早く機械を導入。

「当時は、まだ世の中にワープロが出てきたぐらいの時代。コンピューターとか苦手だったけど、朝から夜遅くまで3か月かかって、プログラムを入力する操作を学びました」。その甲斐あって、以降「数もの（大量生産）」の受注を受け、売り上げを伸ばしました。

震災の危機を乗り越え

これまで一番の危機は1995年の阪神・淡路大震災。創業時からの取引先が一時経営難に陥りました。「一番大変だったときには、西淀川の工場という工場に飛び込みで営業をかけました。結局、愛犬の散歩をしているときに再会したある会社の工場長の紹介で、その後の仕事がずっと広がったの。その犬は亡くなったけど、今でもお水とお花をお供えしているんですよ」と語られます。

「こういう商売は運・不運があるけれど、長く真面目に、品質も納期も守ってきたら、周りはみていてくれるもんですね。いまはこちらからは、営業は一切、かけていません」。

震災の年は、父親が亡くなられた年でもありました。「長男に工場に入ってもらったけど、それでよかったのか、気がかりだった」そうですが、あるとき、2人で夜中までかかって取り組んだプログラムが完成し喜び合う中で、息子から「オレ、モノづくりが好きや」と言われて、ほっとしたとのこと。今ではその睦さんが、代表取締役を務めておられます。

このカーブをプログラムを組んで削り出します。

人を育て、信頼を築く

「西淀川ものづくりまつり」には第1回から参加。きっかけは、西淀川ではじめて大阪工業大学や東淀川工業高校などからインターンを迎え入れたことで、テレビのニュースで取り上げられ、それをみた西淀川区役所から声がかかったのだそうです。また、現在はベトナム系の若手社員を2人雇用されています。

「『やってくれませんか』と依頼されたら、基本的に断りません。どんなお仕事も勉強やからと思って引き受けています」という清水会長の言葉に、仕事への自負と、人を育て、信頼を大切にする誠実な姿勢を感じたヒアリングでした。栗